

平成 24 年 9 月 26 日	病虫害発生予報 10月号	茨城県病虫害防除所 茨城県植物防疫協会
---------------------	-------------------------------	------------------------

農作物の収穫後は被害残渣や被害葉を持ち出すなど

圃場管理に努め、次作の病虫害の発生を抑えましょう。

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
共通害虫：オオタバコガ，ハスモンヨトウ・・・・・・・・・・・・・・・・	1
【防除所レポート】	
平成 24 年の水稻における主な病害の発生経過と防除対策等について・・・・・・・・	2
モモチョッキリによるナシ被害・・・・・・・・・・・・・・・・	3
【その他の病虫害】 ・・・・・・・・・・・・・・・・	
大豆，ナシ，ブドウ，イチゴ，トマト，秋冬ハクサイ，レタス，秋冬ネギ	4
 II. 今月の気象予報 ・・・・・・・・・・・・・・・・	
<p>本文に記載されている薬剤は平成 24 年 9 月 12 日現在のものです。 最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm) で確認することができます。</p>	
<p>詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病虫害防除所 Tel :029-227-2445 予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。 ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/ フェロモントラップデータ随時更新中</p>	

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、秋冬ハクサイでの寄生幼虫数は平年よりやや多く、レタスでの寄生株率は平年並である。また、大豆圃場で幼虫の発生を確認している。
- ② 9月下旬現在、フェロモントラップへの雄成虫の誘殺数は土浦市、龍ヶ崎市で平年より多く、水戸市、筑西市で平年よりやや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 幼虫の齢期が進むにしたがって薬剤の殺虫効果が低くなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② レタス、ハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、発生初期及び結球始期以降の防除を徹底する。
- ③ 抑制トマト等では、収穫終期まで加害を続けるので防除を徹底する。
- ④ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元等、株全体によくかかるよう丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

2. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、大豆における寄生幼虫数、白変ヶ所数ともに平年並～やや多く、秋冬ハクサイ及びレタスでの寄生幼虫数は平年並であり、イチゴでの被害株率は平年よりやや少ない。
- ② 9月下旬現在、フェロモントラップへの雄成虫の誘殺数は水戸市、笠間市、龍ヶ崎市で平年並、鉾田市、筑西市で平年よりやや少なく、土浦市で平年より少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 圃場をよく観察し、若齢幼虫の集団の早期発見に努める。幼虫が中齢以上になって分散して食害するようになると、被害量が増大するだけでなく、薬剤の効果も低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が入るとその後の防除が困難になるため、発生初期及び結球始期以降の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元等株全体によくかかるよう丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

平成 24 年の水稲における主な病害の発生経過と防除対策等について

水稲における主な病害の発生生態、病徴、本年の発生経過及び防除対策について、県内の定点 58 圃場等の調査結果をもとにまとめました。来年の防除対策の参考にしてください。

1. いもち病

[発生生態]

低温、日照不足、多湿等の気象条件で発生する病害である。葉いもちは例年梅雨入り時期の 6 月下旬から発生し始め、梅雨明け直後頃に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃に降雨が続くと、穂いもちが多発生する。

[本年の発生経過]

6 月は、いもち病感染好適日※（BLASTAM による）の出現日数は少なかった。7 月は上旬を中心に感染好適日も見られたが、日照時間が平年よりも多く気温も高かったことから、葉いもちの発生量は平年より少なかった。また、8 月は高温少雨で推移したことから、穂いもちの発生量も平年よりやや少ない～少ない発生であった。

※感染好適日：当日の葉面湿潤（濡れ）時間が一定以上、前 5 日間の平均気温が 20～25℃。

[主な防除対策]

種子消毒は必ず行い、育苗箱施用剤の利用とあわせて、圃場の発生状況に応じて薬剤防除を行う。

2. 黄化萎縮病

[発生生態と病徴]

イネ科雑草で越年した病原菌が、水を介してイネのごく若い組織に侵入し、発病させる。移植 10～50 日後頃のイネが感染しやすく、この時期にイネが冠水等すると被害が大きい。発病の適温（水温）は 18～20℃と比較的低く、冠水等を受けた後、2 週間ほどで発病する。発病株は黄化、萎縮し、葉の幅は広く、やや厚みを増してカスリ状の斑点が入る。また、いもち病等の病害の発生が多くなる。

[本年の発生経過]

県内の各地で発生が見られた。5 月下旬～6 月上旬にかけての大雨の時に、イネが冠水等したため発病したと考えられる。

[主な防除対策]

イネを冠水させないことが最も重要なので、排水対策をしっかりと行う。また冠水をしたら、すみやかに排水し、リドミル粒剤 2 を水面施用する。施用後は 7 日間止水する。

3. 縞葉枯病

[発生生態]

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。主に発病株のヒコバエ（収穫後の再生稲）を吸汁したヒメトビウンカがウイルスを保毒して越冬し、翌年の伝染源となる。

[本年の発生経過]

県西及び県南地域の一部で発生が確認された。特に県西地域では発病株率が 50%以上の圃場も見られた。近年は発生量、発生地域ともに増加傾向にあるため、今後の動向に注意が必要である。

[主な防除対策]

収穫後は早期に耕起してヒコバエをすき込むとともに、ヒメトビウンカの越冬場所である畦畔雑草の除草を徹底する。また多発圃場ではヒメトビウンカの防除対策としてネオニコチノイド系薬剤等による育苗箱施用も有効である。

モモチョッキリによるナシ被害

本年6月、県内のナシ圃場において、リンゴの主要害虫であるモモチョッキリによるナシ幼果への被害が確認された。その特徴について紹介する。

1. 形態及び生態

本種はゾウムシの一種である。成虫の体長は10mm弱、赤銅色で強い光沢がある（写真1）。卵は長径約0.6mmの卵形で乳白色、幼虫は芋虫状で乳白色を呈している。

主な宿主は、リンゴ、ナシ、モモ、ウメ等である。リンゴの場合、成虫は4月下旬から5月上旬頃に出現して7月上旬頃まで生存し、肥大した幼果に口吻で穴をあけ、そこに産卵する。1頭あたり80個前後を産卵し、卵は7～10日で孵化する。幼虫は20～40日間幼果内部で成育した後、果実を脱して、地下5～10cmの位置に蛹室をつくり、約10日後に羽化する。

2. 被害の特徴

成虫は幼果に直径約1mmの穴をあけて産卵し、粘液を吐いて穴をふさぐ。産卵後は、果柄に穴をあける。果柄は加害部から折れ、果実は萎縮し、やがて落果する（写真2）。また、成虫は果実表面を食害するため、浅い食痕が残る。

3. 防除対策

ナシでの登録農薬はない。被害果の中には幼虫がいるので、被害果は適切に処分する。



写真1 モモチョッキリゾウムシ成虫

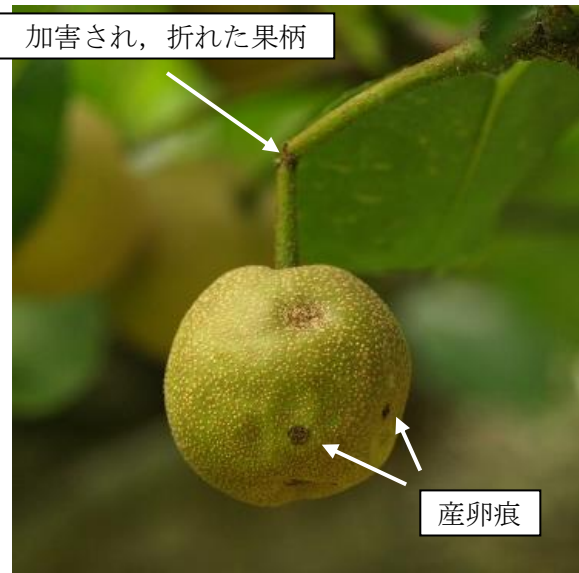


写真2 産卵痕と加害された果実及び果柄

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
大豆	べと病	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	紫斑病	発生量：－	適期収穫に努め，収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。被害残渣は第一次伝染源となるため，収穫時に細断して畑にすき込む等，適切に処理する。
	カメムシ類	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並～やや多い発生である。莢が黄熟する頃まで加害を続けるため，発生の多い圃場では，収穫前日数に注意して防除を実施する。
ナシ	黒星病	発生量：やや多い	秋季防除を徹底する。落葉は翌年の伝染源となるので，集めて適切に処理する。
	ナシヒメシクイ	発生量：－	被害果は水に浸漬するか，土中深く埋める等，適切に処理する。
ブドウ	褐斑病	発生量：やや多い	秋季防除を徹底する。落葉は翌年の伝染源となるので，集めて適切に処理する。
	べと病	発生量：やや少ない	
イチゴ	炭疽病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
トマト	黄化葉巻病	発生量：やや多い (抑制トマト)	9月上旬現在，抑制トマトで発生を確認している(地点率33%)。発病株はただちに抜き取り適切に処分する。促成トマトでは，ハウスの開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置し，媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
秋冬ハクサイ	白斑病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	べと病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	軟腐病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。風雨が多いと発生が助長されるので，台風等の雨の後には，防除を徹底する。
レタス	菌核病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。葉の基部を観察し，発生を認めた場合は初期防除を徹底する。
	腐敗病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。結球開始期に降雨が続くと発生しやすいので，初期防除を徹底する。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：平年並 ～やや多い	9月下旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の気温は平年並か高いと予想され，発生をやや助長する条件である。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 9月22日から10月21日)

気象庁(9月21日 発表)

<特に注意を要する事項>

期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。

<1週目の予報> 9月22日(土曜日)から9月28日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率60%

<2週目の予報> 9月29日(土曜日)から10月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

<3週目から4週目の予報> 10月6日(土曜日)から10月19日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず、良く洗浄しましょう。